法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

平田オリザのワークショップを土台にした英語ドラマリーディング

平野井, ちえ子 / Hiranoi, Chieko

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
4
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
7
(終了ページ / End Page)
27
(発行年 / Year)
2004-02-28
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004493

Hosei University Repository

平田オリザのワークショップを土台にした英語ドラマリーディング

平野井　ちえ子

概　要

本稿は、法政大学通信教育部の2003年度夏期スクーリングで筆者が行なった英語授業の記録とその評価である。教材に映画『草原の輝き』を用い、アクティヴィティに平田オリザの演劇ワークショップを取り入れた、無理のない参加型授業の試みである。

1．法政大学通信教育部とスクーリングの概要

本学通信教育部は、1947年（昭和22年）に設置された本邦初の正規の4年制大学通信教育課程であり、生涯学習のニーズが高まる今日、社会に開かれた高等教育の場として、重要な役割を果たしている。名称の示すとおり通信での学習が中心であるが、全国75都市に設置された試験場で、単位修得試験を行なったり、各種スクーリング（教室授業）を実施して、外国語・体育実技・専門の演習など、通信学習だけでは十分な効果の得づらい科目の指導を充実させるよう努めている。スクーリングは、市ヶ谷キャンパス・地方会場で行なわれ、学生間の交流や教員の直接指導が、自宅学習の孤独を癒したり、正しい学習法を学ばせる、重要なステップとなっている。スクーリングにも集中6日間の半日授業（100分授業×2コマ）で1単位、通年で2単位取得するものがあり、集中6日間の場合には、夏・冬の市ヶ谷キャンパスでのものと、春・秋の地方でのものがある。2003年度現在、通教生の外国語の卒業所要単位は、選択した1外国語6単位であり、うち最低2単位をスクーリングで取得することが求められている。

2．実施クラスの特徴

本稿の主たる報告内容は、2003年7月25日～7月31日までの日曜日を除く6日間の午前クラス（9時～12時30分のうち休憩時間10分を除く100分授業×2コマ）である。

本学の通学課程では、必修語学のクラスは学部割りで編成されているが、通教では1クラスにさまざまな専攻の学生が登録している。ちなみに今回は、受講者12名のうち、法学部法律学科3名、文学部日本文学科2名、文学部史学科1名、文学部地理学科1名、経済学部経済学科3名、経済学部商業学科2名、という内訳であった。年齢では、20代が6名、30代が3名、40代・50代・60代がそれぞれ1名ずつである。

実を言うと、合計12名という人数は、通教スクーリングとしても決して多くはない。本学の専任教員になってから今回が通算10回目の集中スクーリング担当になるが、過去最小のクラス編成だ。夏期スクーリングの外国語科目登録は、予備登録と本登録の2段階に分かれており、日程によって予備の登録を行なった学生のみに、割り当てられたクラスのシラバスを送付して、本登録するかどうかを決めさせることになっている。恥ずかしい話だが、今回筆者は悪凝りが過ぎ、非常に厳しいシラバスを用意して、予備登録で19名あった志望者を12名に減らすという失態を演じてしまった。ただし、厳しい学習内容にもかかわらず受講を決めてくれた受講生は、とても真剣でねばり強く、11名が12コマの100分授業を皆勤、残る1名も事前に事情を説明してこちらの学習指示を仰いだうえ、たった1コマ欠席しただけという、涙ぐましい精勤ぶりであった。

Hosei University Repository

3．シラバス構築の原理

通信のみによる英語コースでは、指定された市販のテキストに教員が作成した「テキストガイド」を用いて自習を行ない、通信によるレポート試験と指定会場での単位修得試験の両方に合格して単位取得、という流れである。したがって、英語の場合、修得できるスキルにどうしても限界が出る。SCSによるコミュニケーションが、通教の授業に取り入れられるには、相当のお金と労力と時間が必要である。だからこそ、スクーリングでは、通信ではできない協同学習を体験させ、一言でも多く発話する機会をつくることを第一に考えている。

ただし、今回の筆者のシラバスは、授業内でアクティヴィティの時間を多く確保したいばかりに、テキストである映画のシナリオ全体を予習してくるように指示して、顰蹙を買った。というのも、指定した金星堂のテキストが訳注が詳しいのと、字幕入りの映画本編は現在VHSでもDVDでも廉価で入手することができるので、語学的に難しいところや映画とシナリオが微妙に異なる細部までは拘らずに目を通してくれればよい、と安易に構えたのだが、今反省すると、細部にこだわる旧来の日本の学校教育では、「読み飛ばす」とか「全体を見渡す」とかいう学習スキルを意識的に教えていないのだから、翻訳本も存在しないテキストなどわずか１～２週間で一冊まるごと予習できるはずがないのである。授業内容がactiveであることは大切だが、それはあくまでそれぞれの学習ステップが学習者にとってaccessibleであることが大前提だ。さらにその学習方法を自習にも生かし継続していけるsustainabilityがあれば秀逸であろう。

4．開講、そして軌道修正

(1) 初日の緊張感

主たる教室としたスタジオは、最大約80席の机付き椅子を使用できるだいたい10メートル四方の空間で、椅子がすべて動かせるので、授業の規模と形態に応じて柔軟な使い方が可能である。今回は、筆者のスクーリング授業の直前まで他の利用者が使っていたため、「椅子は12席分適当に中央にばらつかせて、残りは両脇に寄せておいて下さい」と伝言したところ、かなり几帳面で良心的な利用者だったと見えて、あたかも厳正なオーディションか何かのように、ちょうど部屋の前後の真ん中に12席の椅子を一直線に並べて下さった。これを見たときはショックだった。早めに入室していた受講生はもっとショックだったらしく、皆その12席を避けた後ろに、壁にはりついて着席していた。学習空間の設定は、大事な一歩である。膨大な予習量、オーディションのような椅子配置で、完全に腰が退けてしまっているのが一見してわかった。

いつものスクーリングなら、最初に自己紹介と雰囲気づくりを兼ねて「仲間づくり」のゲームとその応用編とも言うべき「ステータス」というゲームをやるのだが、12名では少なすぎてしらける可能性が大きい。これらのゲームは、劇作家・演出家の平田オリザが日本演劇学会の2001年度春季大会で紹介したのを、筆者がしばしば便利に借用させていただいているものである。なお、これらのゲームは、後述するワークショップビデオ『平田オリザの文法』には含まれていない。以下、概略を説明する。

まずは仲間づくりのゲーム。「好きな色（果物）別に仲間を作って下さい」と最初はわざと不親切に指示を出す。最初は当惑顔の受講生も、「黙っていては仲間はできませんよ、どんどん声を出して動いてみてください」と励ますと、たいてい活発に動き出し、「赤組」「黒組」「ピンク組」、あるいは「バナナ組」「りんご組」「メロン組」などに分かれる。ここであんまり凝った色や果物を主張すると仲間ができないので、「サーモンピンク」とか「ドリアン」などというのは、タブーであることが体験できる。

この簡易版を土台にして、ステータスというゲームを行なう。まずは人数分の数字を書いたカードを配る。数が大きいほど活発な趣味、数が小さいほどおとなしい趣味、というルールで、自分の趣味を一つ決める。自分の数は決して教えず趣味を話し合って、一番近い数の人とペアをつくるのが目的である。この際、一度に４人以上で話してはいけない、というルールがある。ここで求められるのは、動くこと・声を出すことなど、仲間づくりのゲームで求められたのと

Hosei University Repository

同じ作業の他、相手の話に耳を傾け意図を探る姿勢が必要になる。なぜなら、このゲームで成果を上げるには、聞いた趣味を自分の基準で勝手に全体のスケールに位置づけるのではなく、相手が話している趣味をどの程度「活発」または「おとなしい」と考えているかを探らなければならないからだ。また、「仲間づくり」で、「ドリアン」や「サーモンピンク」がタブーであったように、「ステータス」でも運命の出会いにこだわると他所でどんどんペアが出来上がっていき、かえって選択の余地が限られてくるので、ほどほどのところで妥協することもコツである。ここでは、自分のほんとうの趣味にこだわる必要がないので、数字に応じて「ふりをする」ことが、気楽でもあり、新鮮でもある。正面切っての堅苦しい自己紹介より、素顔に近いナチュラルな態度で、声を掛け合うことができる。

いつもは強い見方のこのゲームが今回は成立しそうもなく、過酷なシラバスで緊張しきった受講生の心を和らげるため、数ヶ月前の2002年度冬期スクーリングの授業風景を40分程度に編集したものを学習内容・方法の解説を入れながら見せた。無理のない学習の流れを意図していることを示したかったのだが、土台が緊張しきっているため、「あんなに積極的にはやれない」とかえって不安がる人もいたし、冬期スクの教材は簡単な日常会話だったので、自分たちの映画シナリオ一本分と比べて不公平感を抱いた人もいたようだ。また、「私たちの授業風景もビデオ収録したら他のクラスで見せるんですか？」という質問には、「客観的によくできているカッコいいところしか見せません」と言って納得していただいた。だからこそ、前回のビデオを見て「あんなに積極的にはやれない」と思わせてしまったのかもしれない。

(2) 2002年度冬期スクーリングのビデオ

このビデオには、ボアソナードタワー（市ヶ谷キャンパスのシンボルで、筆者が授業に使用するスタジオやCALL教室もこの中にある）の施設紹介、冬スクの主教材だった英会話ソフトNative World Pro.によるCALL学習風景、「ステータス」の活動風景、ショートコント（日本語）の創作発表、Native World Pro.を土台にしたロールプレイ風景、最後に番外編として笑えそうな授業のほのぼのシーンをいくつか収録してある。

通教生は普段キャンパスに来ない。だからほとんどの学生はスクーリングで友達や以前習った先生に会えるかもしれないことを楽しみにしている。スクーリング期間中にキャンパス周辺をうろついていると、「5年前のスクーリングではお世話になりました」などと丁重な挨拶を受けることも少なくない。彼らにとって2000年4月にオープンしたボアソナードタワーは、半ば観光名所のような存在であるらしい。しかもこの3階には、今回使用したスタジオ、CALL/LL教室、語学・視聴覚教材の所蔵と自習コーナーを維持するAVライブラリーがあるので、自分達に与えられた学習空間を把握し有効に活用してもらうためにも、ボアソナードタワーの施設紹介は大きな意味がある。

CALLの学習風景は、今回のスクーリングとは直接関係ないようだが、PC画面内のnative speakerとの対話練習から始まり、PCを離れて日本語で演劇ワークショップを経験して、最後に発表した英語でのロールプレイにいたるプロセスを見せたかったので、あえて割愛しなかった。CALLの利点は、集団内での個別学習を可能にする点にあるが、本来コミュニケーションとは対人で行なうもの、CALL教材を導入してもどこかで協同学習の醍醐味を経験できるよう配慮したいものだ。

「ステータス」は、前述のとおりのゲームで、指導者にとっても参加者にとっても、簡単でしかも短時間で友好的なムードをつくれるスグレモノなのだが、アクティヴィティにはハプニングがつきものである。このビデオでも、実に協力的なムードメーカーの関西出身の男子受講生がいて、全体的には授業への貢献度大だったのだが、逆に協調性と和の精神があり過ぎて、自分の「趣味」を決めずに参加してしまい、収拾がつかなくなってしまったケースがある。ただ、これも含めてこの人の個性が微笑ましく、あながち失敗というわけでもないだろう。以前の別のスクーリングで困ったのは、「一度に4人以上で話さない」というルールが破られたときだ。

Hosei University Repository

多分本人はこのルールを破っているつもりはなかったのだろうが、一人とても存在感のある女性がいて、周囲が彼女の発言に関心を持って聞き耳をたててしまい、とうとう彼女がクラス全体に向かって「趣味」をスピーチしてしまったのだ。このゲームの醍醐味は、初対面のいろんな人と小まめにおしゃべりをしながら目的を達成することにある。だれかの一人舞台はゲームの主旨を逸脱する。ビデオのクラスは18名編成だったので、「ステータス」をするにはちょっと少なかった。しらけるほどではなかったが、この数だとゲームが簡単になってしまう。経験からすると30名くらいが盛り上がるようだ。日本語のショートコント創作は、今回の夏スクでも行なったのでその日のセクションで後述するが、ここではビデオのクラスが展開してくれた創作例を紹介しよう。台詞は原則としてたった一言。「のむ？」である。「のむ？」という台詞は、日常的で誰にでも必ず一コマくらい思いつけそうなので、課題として無理がないし、オチをつけようと思えばいくらでもコンテクストを創作できる、素敵なテーマである。このアクティヴィティは、平田オリザと青年団の劇団員による早稲田大学エクステンションセンターオープンカレッジの2001年夏期講座で、筆者自身が参加したものである。これも『平田オリザの文法』には入っていない。

(1) 3人で食事をしていると、うち1人がよほど空腹と見えて、丼ものをがつがつ貪り食っている。とうとう胸につかえてしまって、別の1人がコップを差し出して、「のむ？」。短くてわかりやすい、コントのツボを押さえた作品だった。

(2) オフィスらしきところで、男性2人が仕事を終えた様子。一方が片手でぐいのみを口元に持っていくしぐさをして、「のむ？」。「これから一杯いこか？」というところだろう。

(3) 2人が並んで歯磨きをしている。と1人が口をゆすいだ水を呑んでしまって、別の1人が驚きと非難のまなざしを向けて、「のむ？」。一般的には、勧めたり誘ったりの「のむ？」が思いつきやすいところだと思うが、ここでは、「のむか、フツー！」という非難のこもった面白いコントだった。

(4) 赤提灯らしき雰囲気。1人はすでに泥酔状態。それでも勧める、いや命令するもう一人、「のめ！」。アルハラだ。演技しだいで面白くなる設定だが、先輩役が女性で品が良過ぎてわかりづらく、惜しかった。

(5) 最後は刑事ドラマ仕立て。「のむ？」という以外の台詞を自発的に加えている。刑事役の「いい加減にゲロしろ」に始まる殺伐とした応酬が、やがて「おまえにもお袋さんがいるんだろ」の泣き落としから、湯呑みを差し出しての「まあ、のめ。」「すんませんでした。」で終結する。ほんとはカツ丼でやりたかったのだそうだ。

本来的には、このコントは、「のむ？」一言でまとめることが前提なので、早大エクステンションでこのアクティヴィティの講師を務められた青年団の山内さんが見たら、苦笑いするかもしれないが、筆者のクラスでは、とにかく一つの台詞からさまざまなコンテクストを考えてイマジネーションを膨らませることが目的なので、この点ご容赦いただきたいと思う。

英語教育の分野では「ロールプレイ」というと、即興的に自分のことばで役割を演じることを指すようだが、筆者の授業では、スクリプトをほぼそのまま演じることもロールプレイと言っている。ビデオのクラスでは、CALLによる双方向性英会話教材Native World Pro.の「海外渡航編」をラボで個別学習した後の仕上げとして、ペアごとにその中のスキットを選んで演じてもらった。内容は、機内食の頼み方、タクシーの乗り方、入国審査の答え方、両替のしかたなどである。この教材はレベルがかなり易しいので、スクリプトは暗記するよう求めた。もちろん動作・小道具つきである。

あまり即興性にこだわると言語情報のインプットの質と量が大きく制限されるし、発話の出発点としてはやはり何かの書かれたモデルがあった方が取り組みやすいと思う。ただし、学生たちが発表に向けて練習していく中で、現時点では難しくて覚えづらい単語やフレーズなどを易しく言い換えてもよいし、観ている人が楽しめ

Hosei University Repository

るようなアドリブ感覚の台詞を付け加えてもよい。また、筆者は発表の際の留意点として、スクリプトに忠実に流暢なパフォーマンスを行なうのもよいし、逆に台詞を忘れたとき対話の流れを壊さずに復帰することができたら、それはそれで大いに評価する、と明言している。頭では覚えたつもりの英語が、皆の前に出て、なにがしかの動作を行なうと、出てこなかったりするものだ。ここでスクリプトにこだわりすぎて、言い忘れた間投詞を言うために、対話の流れを戻したり、ペアを組んだ相手が間違えてスクリプトと違うことを言った時に、そのままでも対話として十分続けられるにもかかわらず、言い直させようとして聞き返したりすると、どんどんリアリティは希薄になっていく。大切なのは、大筋でスクリプトと同じ流れを辿ってみることだと強調している。言い間違い・言い忘れは、瑣末なことである。こうした筆者の評価観点を、ビデオに即して今期の受講生にも力説した。

現実のコミュニケーションは書かれたとおりには進行しない。かと言って、即興性へのこだわりは、受講者に共通のインプットが相当量確認されたレベルでないと、演じる方にも観ている方にも、当惑ともどかしさを与える。学生のレベルや講座の目的に応じて、言語情報のインプット量と即興性などコミュニケーションとしてのリアリティのバランスをどう考えるかが、大切である。特に、高等教育では、学生の知的レベルと学習対象言語への習熟レベルの乖離は、慎重に考慮すべき点である。

「番外編」には、必ずしも積極的でない学生に対し、筆者が「保険だよ」と言って励まし（脅し？）ながら発表を求めているシーンだとか、自分がビデオカメラにたくさん映れるよう小道具のアングルを換えて張り切っている奇特な学生の姿などが収録されている。いずれにしてもクラス授業の雰囲気に慣れ親しんでもらおうと思って見せたのだが、課題の多さへの不安と緊張からか、ほとんどの学生がにこりともせず、筆者の不安はつのる一方だった。

(3) 私の好きなもの

現在若者に人気の劇団に、劇作家・演出家の成井豊が率いるキャラメルボックスがあり、「成井豊のワークショップ　感情解放のためのレッスン」は、演技教師としての成井がプロの役者を目ざす人のためにまとめたレッスンの集大成である。同じく若者の支持を得ながら、フツーの人の演劇理解を高めることを目的にした平田オリザのワークショップとは、対照的である。一口に演劇ワークショップと言った場合、それがこの二つの系統のいずれに当たるかを判断することが大切である。

成井のワークショップは、発声・ストレッチ・エアロビクス・エチュードなど、厳しいレッスン内容の多い中、一つだけ筆者が自分のクラスで使ってみたいと思うアイディアがあった。それが、「私の好きなもの」だ。B5版くらいの紙に、自分の好きなものを10個挙げ、その理由も述べるというものである。成井の俳優修業の一環としては、役者には好奇心が大切であるというメッセージだったらしいのだが、筆者はこれを自己表現の練習として利用することにした。好きなもののジャンルは問わない。成井の本の劇団員によるレポートも、芸能人あり食べ物ありスポーツありの欲張りな自己紹介の記録に見えた。

実は、筆者はこのレポートをステータスの変わりに自己紹介的な効果をもつものとして導入し、ついでにこのレポートの記述でどこか近い傾向をもつ人どうしを、ロールプレイのペアに決めていった。たとえば、食べ物をたくさん挙げている人どうし、阪神ファンどうし、大リーガーファンどうし、字がきれいな人どうしなどである。また、逆に共通項にはなりそうもない個性的な項目を紹介した。生まれて初めて経験しているダイエットの緊張感、誰にも邪魔されず「無」の境地になれるトイレ、子供の頃から食べている「蓬莱551」のブタ饅（地方色がいい）、近所に住んでいて小遣いをせびりにくるが可愛くてたまらない孫たち、「草原の輝き」を見て思い出した旧姓S.H.さん、など、不安と緊張の中でも、紙に書くとなれば、思わず顔のほころんでしまいそうなコメントもあって、筆者も少し安心したし、筆者が回収したレポートを少しずつ紹介するにつれてクラスの雰囲気は変わっていった。ステータスと違って、参加者どうしの対

Hosei University Repository

話ではなく、筆者が独断と偏見のもとに共通項を持つ人どうしを適当にくっつけてしまったには違いないが、人数も少なくいきなりゲームをするのが憚られるほど大人しいクラスでは有効な仲間づくりの方法であることが実感された。「自己紹介をして下さい」と言ったら、何を話したらよいか当惑してしまう人も、「私の好きなもの」をジャンルを問わずに書いてよいとなれば、かなりとっつきやすいのではないだろうか。

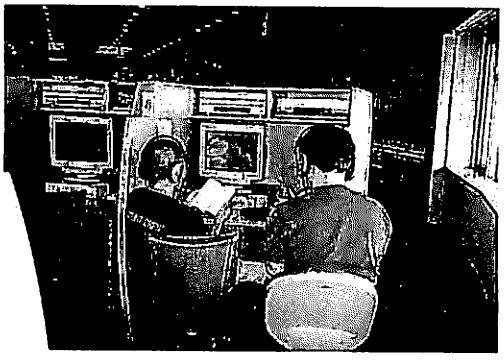
(4) 予習しましたか？

「私の好きなもの」を書いてもらう段階で、無謀な課題設定を修正せざるを得ない予感があったので、同じ紙の裏に「私の予習内容」も書いてもらったところ、予感は的中、大幅に負担を軽減することにした。

まず、全11場のうち最初の1場だけは、シナリオの形になれるため、逐語的に意味を確認するが、残りの分については、1ペア5分程度の持ち時間でドラマリーディングができる範囲を各ペアごとに選んで予め報告させ、その部分のみ訳読練習と講義を行なう。これは、教材映画のソフトの流通が良かった強みである。初日の残り時間と二日目は、第1場の読解と講義に終始した。それでも、「これで何とかついていける」と思ったせいか、安心した受講生の笑顔が眩しかった。

(5) 週末の宿題

今期のスクーリングは、2日目と3日目の間に週末の休みが入るスケジュールだったので、気持ちを切り換えて軌道修正するには丁度良かった。宿題は、各自もう一度「草原の輝き」を見て、どの部分をドラマリーディングに使いたいか考えてくることだ。月曜日にペアで相談して発表の箇所を決めることにした。ペアで発表箇所を決めるには、2人一緒に映画をモニターできると能率が良い。大学のAVライブラリーにも「草原の輝き」はDVDとVHSが各一本ずつ所蔵があるので、当初は6ペアが交代でモニターできればよいかと考えたが、12人の受講生のうち4人がソフトを購入して事前に何度も観たという熱心さのおかげで、ちょうど6ペアのソフトがそろい、クラス全員が同時にAVライブラリーのブースでペアごとにモニターすることができた。



5．3日目のワークショップ

(1) 身体表現とイメージの共有

早く気持ちを切り換えてもらうために、この日はいきなりワークショップから入った。朝9時からの授業なので、少しずつ目を覚ます意味で、簡単な手指の運動から始める。これはもともと早稲田大学エクステンションカレッジでのワークショップで青年団の大塚さんが担当したアクティヴィティから借用したものだが、筆者のクラスでは最も簡単なものだけに留めた。

最初は、順番に手指を折ったり開いたりするだけのものである。ばかばかしいように聞こえるかもしれないが、通教のようにさまざまな属性の学生が集まったクラスだと、全員がリズミカルにできるようになるまでには以外と時間がかかったりする。

全員がきれいにできたのを確認したら、2人1組になって、1人が垂直方向の大きな拍手、もう1人が水平方向の小さめの拍手を、ぶつかり合わないように交互に行なう。徐々にスピードを上げていかせるとすぐにぶつかるようになってしまうので、寝起きの運動としては有効だが、あまり長くは続かない。

3つめのアクティヴィティは、拍手のリレーだ。これも実に単純な作業なのだが、グループ別に速度を競わせると意外といい大人がむきになって盛り上がる。今回は6人ずつのグループ2組で競わせた。各グループのリーダーを決め、リーダーから拍手をリレーしていく。今回のク

Hosei University Repository

ラスでは、おっとりした人が多いと見えて、けっこう速度を上げるのに時間がかかったので、筆者が途中でこうコメントした。「前の人の音を聞いてからでは遅いんですよ。2～3人前の人の手の動きを見て、早めに動き始めないとスピードは上がりませんね。」この後むきになって頑張りだした人が多く、一方のグループはかなりのところまでスピードが上がった。もう一方のグループには、非常におっとりした人がいて、どうしてもそこでつまずいてしまい、全体としてスピードが上がらず、グループ対抗は明白な勝負がついてしまった。ただ、別にこれができなかったからといって、その人の能力や人格が大きく問題視されるものでもない、いたって罪のない競争なので、気が楽だ。

大塚さんのワークショップでは、この他、次のようなゲームがあった。5～6人が一組になって、1人1文字または2文字ずつを発声し、全員でなにがしかのフレーズをつくって発表するというもの。たとえば「お元気ですか？」とか「楽しいですね。」とか、ごく簡単なフレーズでよいのだが、イントネーションをつけることで、コンピュータ音のような印象を避けることが求められる。筆者の入ったグループでは、「おなか、いっぱい。」というフレーズを、「いやあ（全員で)」「お（1人)」「な（1人)」「か（1人)」「いっ（1人)」「ぱい（1人)」と分担し、前後に全員で牛丼をむさぼり食うしぐさと満足して腹鼓を打つしぐさを入れて、フロアの嘲笑を買った。一番難しかったのは、手拍子や音の出る物を使って、全員で統一のとれたリズムのコンビネーションを創っていくというもの。誰かがベースとなるリズムをつくり、その後1人ずつ別のリズムを創って加わっていく。前の人が入ってリズムが安定したところで加わるのがコツである。これは、あんまり頭で数えすぎるとわからなくなってよけい難しくなるらしい。身体でリズムをとりながら参加することが必要だ。これらのゲームは、協同学習の土台を築く上では非常に有効なのだが、短期コースの英語授業のウォームアップとしては、やや複雑で時間もかかるので、今回の授業には利用しなかった。

この後、身体全体を使うアクティヴィティに移行する。ここからは、日本演劇学会で平田自身が行なった内容になる。最初は信頼関係をつくる練習。2人1組になって、背中合わせで、背中で仲良しごっことけんかを表現する。あんまり一生懸命やると仲良しもけんかも同じような感じになってしまって笑える。平田のワークショップでは、2人が床に背中合わせで腰を下ろして、最初は腕を組んだまま声をかけ合って立ち上がるところから、腕をくまない、声をかけない、など難しくしていく。筆者のクラスでは、教室の床が汚かったので、これはやめておいた。もう1つは、相手を背負って、組んだ腕を解いたり、揺らしたりするというもの。これもお互いに相手を背負ってみるところまではできたのだが、腕を解くのは恐いと言われたので、それまでにしておいた。こんなところで無理やり個人の衛生観念や三半規管の感度に挑戦する必要はない。

台詞を使わない身体レベルのアクティヴィティで一番盛り上がったのは、平田のワークショップの「イメージの共有」である。ポイントは、演者内部のイメージ共有とそれを外部に表現することである。課題は、2人のキャッチボール、5～6人での大回し縄跳び、3人2組での大玉の投げ合いである。これらの課題を道具を使わずに身体の動きのみで表現する。平田のコメントでは、この中で一番イメージしやすいのが縄跳びの大回し、一番しにくいのが3人ずつの大玉投げということだった。たしかに2人が縄跳びを大回ししているところへ4人が順番に1人ずつ入って跳ぶものは、非常に盛り上がった。一方のグループは、1人ずつ入っては抜けていく形をとったので、比較的淡白に楽しんでいたが、もう一方のグループは、1人ずつ加わっていく形だったので、中の4人がいつまでも跳び続けていて、苦しそうな人が出てきたので、思わず筆者が「誰かつっかからないと、止められませんよ。」と言ったところ、1人が跳び損ねるふりをしてくれて止まったのである。大回しが全体を統一するリズムになっているところへ、中で跳ぶ人の数が増えていくと達成感も生まれるので、やりやすく楽しめたのであろう。2人のキャッチボールは以外とイメージしにくいと

Hosei University Repository

いう平田のコメントにもかかわらず、このクラスでは、ボールを後ろ手に受けるふりをしてみたり、取り落して拾いに行くふりをしたり、ジャンプして取ってみたりと、自発的に変化をつけてくれる人が多く、「気に入っているんだな」と実感させてくれた。一番難しいという3人ずつの大玉投げも、なかなか良かった。誰からともなく自然と声をかけ合うようになり、重そうに投げて見せたり、受け取る方もわざと一拍遅らせて、面白おかしく演出していた。

(2) コントをつくる

前回のビデオで具体例を見た後なので、取り組みやすかったと思う。ペアで試験勉強をしていて一服を勧める「呑む？」とか、快気祝いに瓶ビールをついでの「呑む？」とか、もの欲しそうな友達に自分の分を分けてあげる「呑む？」など。中には、汚いオチのついた「呑む？」もあったが、ここでは紹介しない。一番最後までこだわって発表してくれたペアは、車の買取りセンターを舞台にして次のようなオリジナルシナリオを展開してくれた。

A：いらっしゃいませ。
B：新車買いたいんだけど、金無いんで、3年前に買ったBMをね…。
A：はい、じゃ拝見します。
B：ちょっと、後ろ当たってんだけど。
A：はあ、なるほど、なるほど。
B：むこうの店では400万で買ってくれるんだけど…。
A：まあ、うちでは、ちょっと、200万が限界ですねえ。
B：そりゃないだろう。
A：いやいやいや…。
B：ちょっと、何とか、ねえ、ちょっと、アレしてくださいよ。
A：うーん、いくらくらいですかねえ。
B：あの、できるだけ…。
A：うーん、200…、うん、220万てとこですかねえ。
B：もうちょっと何とかなりませんかねえ？次もまたここへ持ってきますから。お願いしますよ。
A：そう、でも、230が限度ですね。
B：400万くらいで何とか…。
A：400万はこりゃ無理っすね。すいません、他当たってもらえますか？
B：あの、うちの妹、けっこうかわいいんだけど…。
A：はっ？
B：うちの妹かわいいの。
A：これ、思ったより、けっこうきれいっすね。…妹さん、おいくつですか？
B：18。
A：はい、OKです。400万で買います。
B：呑む？
A：呑みます。

やりすぎといえばやりすぎだが、たった一言の台詞に対するイマジネーションを広げる意味で貴重な作品提供である。何よりもこうして積極的に課題に取り組んで自分達の持ち味を表現したところが、クラスへの貢献度大であり、楽しんでいる点が好感度大でもあった。

(3) 日本語シナリオによるドラマリーディングの基礎練習

今回のテキストは、前回ビデオのCALL教材の入門英会話と違って、語学的なレベルが高いので、発表を無理やり暗記でロールプレイさせようとすると、途中で来なくなったり、発表が終わったらすべて忘れるような丸暗記をする学生が出てくることを恐れ、台本を持って芝居をするドラマリーディングの形をとることにした。まず、日本語によるドラマリーディング体験ということで、平田オリザのシナリオ抜粋をやってみた。これも平田が自分のワークショップで使っている抜粋をそのまま借用した。これらの抜粋の取り組みやすさは、雰囲気がとても日常的なので（元の戯曲の設定は日常的とは言いがたいが）、力んで感情を込める必要がないことである。逆に、やりづらいと言う向きからは、抜粋だけだとあまりにも他愛ない台詞の連続で全体の話の流れが見当つかず、台詞のコンテクストや人物の特徴がわからないため、役に入って

Hosei University Repository

いけない、という意見が出た。やりづらいと言ったのは、「呑む？」のコントで、最後の一番凝ったシナリオを創ってくれたペアだった。こういう意見が出ること自体、ドラマを楽しみ始めているしるしなので、筆者は大変満足に思った。ドラマリーディングの練習には、『平田オリザの文法』が非常に役に立った。このように気前良くワークショップをビデオにして公開してくれている例は珍しいし、内容的にも役者修業に特化したものでなく演劇鑑賞教育のようなところがあるので、練習内容に無理が無く、分野を問わずドラマを使った教授法を試してみたい教員にはおすすめである。内容は、平田自身が次の７項目に明瞭に分類している。

① ニュートラルな身体を獲得する
② 意識を分散させる
③ 存在を意識する
④ 不在を意識する
⑤ 同時多発会話
⑥ 創作
⑦ 創作発表

「ニュートラルな身体を獲得する」ことは、演技を学ぶ出発点として大切な段階である、と平田は言う。他人の書いたことばをしゃべろうとすれば緊張するのが当たり前だし、意識して身体に力を入れることはたやすいことである。演技を成り立たせるさまざまな作為の土台として、リラックスしただらしないくらいの素の状態を意識する練習が必要なのだ。素の状態での自分自身の個性を把握することが演技するときの中核になる、と平田は言う。筆者が使ったシナリオは、平田オリザ作『この生は受け入れがたし』からの抜粋である。『平田オリザの文法』にもこのシナリオを使った練習が収録されている。この芝居は、東北の寄生虫研究所が舞台になっていて、登場人物は、以前からいる研究所員３名と最近東京から転勤してきた新任の研究所員とその妻の５人である。つぎの抜粋は、非常に偏った話題の多い空間における珍しく日常的な社交会話である。まずは、向かい合わせの椅子に腰をおろしたままやってもらった。

高木(男)　西島さんには、話しました？
由美(女)　え？
高木　こっちの生活、慣れないこと？
由美　ああ、ええ、
高木　まあ、何か、あれば、吉田さんとかに相談してみて下さいよ。
由美　はい。
高木　なんか、スポーツとか、やらないんですか？
由美　え？
高木　スポーツとかやればいいんじゃないかと思って。
由美　ああ、
高木　団地でやってるでしょう、色々。
由美　ええ、でも、まず、ちょっと、打ち解けられなくって。
高木　ああ、そうか。
由美　まあ、そんな、深刻なあれじゃないですから。
高木　ええ。
由美　子供でもいれば、ちょっと違ったんでしょうけど。
高木　ああ、ええ・・・・・ま、元気出して。
由美　今日は、どうも、ありがとうございました。
高木　ああ、じゃあ、西島さん、呼んできましょうか？
由美　あ、いいです、いいです。
高木　でも、
由美　このまま帰りますから。
高木　いや、呼んできますよ。
由美　はい、じゃあ。

なるほど、ここだけでは話がわからないと当惑する気持ちもわかる。にもかかわらず、『平田オリザの文法』では、やはり役者志望の参加者が多いのだろうか、こんな内容のない会話をするのに、無理に感情移入した妙に深刻な芝居をするので、平田の指示で、床に寝そべったり広告を読んだりしながら力まない自分の声で話す練習をさせられる風景が収録されている。

筆者のクラスでは、ほとんどの参加者がとて

Hosei University Repository

も自然に自分の声で会話していた。この日、身体と声を少しずつ使い始めた段階づけが良かったのではないだろうか。ドラマリーディングに際して注意したことはつぎの3点である。なるべく相手の顔を見て話す。無理に芝居しない。シナリオを見たいときは、俯かないように、シナリオを目線と同じくらいの高い位置に持って読む。

つぎは、平田のことばを借りると、ここに「負荷」をかけていく。ここで言う「負荷」とは、「意識の分散」である。意識を分散させるアクティヴィティによって、自分本来の声を引き出すとともに、日常では無意識に同時に行なっている複数の対話や行為を、他人の書いたシナリオで意識的にこなすことができるような訓練にもなる。これが俳優の技術である、と平田は言う。もちろん筆者の英語クラスは英語劇役者を育てるクラスではないわけだが、少なくともこの練習によって「話す」ということはさまざまな身体表現のごく一部にすぎないということが体感できると考えて、実践してみた。『平田オリザの文法』では、つぎのような「負荷」がかけられていく。①の「ニュートラルな身体を獲得する」練習と同じ対話をやりながら、まずはゆっくりと同じペースで歩き続けること。決して立ち止まらず、身体をまっすぐ前に向けて、相手の顔を見るときも、顔の向きだけを変える。これをベースとして、ペア以外の人が「こんにちは」「おはよう」などと声をかけてくるのに対して同じことばで応える、ペアの片方が収録のカメラの方を見て「今日カメラ何台入ってる？」と聞き、もう1人が「～台」と答える、1人が用意されたハードルをまたぐともう1人は右腕を後ろに左腕を前にまわす、通路の最後に落ちている恐竜のミニチュアに気づき、1人が拾い上げ、1人が「トリケラトプス」とつぶやく、などである。

筆者のクラスでは、空間が限られているほか平田のビデオとは環境が違うので、教室の対角線に沿ってガムテープを貼り最長の通路を確保し、ハードル越えなどを割愛し、収録カメラの台数の代わりに時間を尋ねることにして、簡略版で行なった。最後の恐竜は持っていないので、プーさんのぬいぐるみを代用して、「あっ、プーさんが倒れてる！」「たいへん、助けてあげよう！」の後、1人が拾い上げるというかたちにした。また、一度に沢山の「負荷」をかけるとわからなくなりそうだったので、小刻みに歩く、挨拶に応える、時間を尋ねる、プーさん救助、と段階を踏んで「負荷」を増やしていった。「話す」ということが多くの身体表現の一部にすぎないことを体感でき、本にかじりつかずに発話する態度が学べたのではないだろうか。

今回のドラマリーディングの発表は2人1組なので、2人が3人になる（存在を意識する）とか3人が2人になる（不在を意識する）というアクティヴィティは、一見関係無いようだが、筆者としては、シナリオの「間」の面白さを理解し、「間」を生かしたリーディングを学んで欲しいと思ったので、これも『平田オリザの文法』と同じシナリオで全員に参加してもらった。

「存在を意識する」は、つぎのシナリオである。

（汽車の中、AとBが向かい合って座っている。）

A（男）：それがね、子どもの頃のことで覚えてるのは火事のことだけなんだな。

B（女）：え？

A：　夜中に火事になったの、家が。

B：　ああ、え？

A：　それが、原因が、どうも、焚き火の火の粉が飛んできて、それが枯れ草に燃え移ったらしいのね。

B：　怖いねえ。

A：　うん。それをなんか、覚えてんだ。すごい怖かった。

（C（女）登場。）

B：　地震より怖かった、こないだの？

A：　ああ、あのときは、寝てたから。

B：　ああ、前にも聞いたっけ。

A：　うん。

C：　あの、ここ、よろしいですか。（Bの隣の席を指す。）

B：　ああ、どうぞ、

A：　こっち来たら。

B：　ああ、（腰をうかす。）

C：　いえ、ここで。（座る。）

Hosei University Repository

B：　そうですか。（元の椅子に座る。）
C：　すいません。（雑誌をひろげて読み始める。）
B：　いえいえ、
・・・・・・
A：　さっき、トンネルに入るとき、外見てたら、こうもりがいたよ。
B：　えー、
A：　教えてあげようかと思ったけど、寝てたから。
B：　ああ、なんだ。
A：　うん。
・・・・・・
A：　旅行ですか。
C：　ええ、まあ、
A：　ああ・・・私たちも、旅行なんですよ。
C：　ああ、
A：　どちらまで？
C：　いえ、まあ、何となく、こっちの方をまわってみようかと思って、
A：　ああ、いいですよねえ・・・
（3人とも、何がいいのかよく判らない。）
C：　ええ、
B：　食べません？（みかんを差し出す。）
C：　いえ、どうも。
B：　おいしいですよ、意外と、
C：　あ、いえ結構です。
B：　ああ。（みかんを引っ込める。）
C：　あの、どちらまでいらっしゃるんですか？
A：　いえ、あの、私たちは、何にもないんです。終点まで行って帰ってくるだけで。
C：　はあ、

このシナリオで注意したい大きな「間」は、「さっき、トンネルに入るとき」の前と、「旅行ですか？」の前の2箇所である。AがBに子どもの頃の火事の話をしているところへCが登場し、Cの座席をめぐるやりとりになり、Cが着座すると最初の間になる。この後のこうもりの話は、形の上ではAとBのやりとりになっているが、最初のやりとりと違って、Aは話しながら、BとCの両方に注意を向けている。このことはシナリオを黙読するだけだと見逃してしまう人もいようが、自分もこの対話に参加すると、Cの登場がAとBの会話に影響しているのが実感できるはずだ。次の「旅行ですか？」に始まる対話は、実にぎこちない居心地の悪そうな対話で、AとBのCに対する関係の築き方がクローズアップされる。入ってきた人、ここでは汽車の中で相席した人とどのような関係を結ぶかを、AとBが交互に探る対話になっている。「旅行ですか？」は、その発端であり、乗り物の中で相席した見知らぬ人に話しかけるかどうかという個人の文化を象徴する発話でもあるので、この前に「間」をもたせると、観ている人は緊張して3者の関係の変化に想像力を働かせることになる。Bの「食べません？」という発話も、新たな関係を模索するという意味で「旅行ですか？」と似た役割をもつ。たまたま相席した見知らぬ人に話しかけるかどうか、という段階を通過した後、見知らぬ人に食べ物をすすめるかどうか、という個人の文化が問われる部分である。シナリオ上には、「食べません？」の前に明瞭な「間」の表示は無いが、この発話は、「ああ、いいですよねえ・・・」「ええ、」というAとCの間の曖昧なほとんど意味の無いやりとりの気まずさを取り繕う役割を担って失敗する部分の発端なので、この前にも小さな「間」を意識すると、この台詞が生きてくる。

「不在を意識する」は、つぎのシナリオである。

（汽車の中、B、Cが並んで、AがCの向かいに座っている。）
A（男）：そいでね、その群衆を見てね、ジョー・ディマジオが言ったのね。「なんだ、こいつらは」とか。
B（女）：なんだ、この黄色い猿たちは！とか。
A：　いや、そこまで言ったかどうかわかんないけどさ。
B：　言ったわよねえ、そのくらい。
C（女）：ああ、
A：　いいんだって。だからね、そいでね、そう言ったんだって、「なんだ、こいつらは」って。そしたらモンローが、

Hosei University Repository

気をきかせてね、ジョーディマジオに気をきかせて、「みんな、あなたを見に来たのよ」って言ったんだって。

・・・・・・

A：　まあ、そういう話ですよ。
C：　はあ、
A：　いい話でしょう。
C：　うーん。
B：　うん。(立つ)
C：　え、どっか行くんですか？
B：　うん、ちょっと、トイレ、
A：　え、さっきも行ったじゃない。
B：　いいでしょ、別に。
A：　いや、まあ、いいけどさ、
B：　うん。
(B、下手に退場。)

・・・・・・

C：　ジョー・ディマジオって、誰ですか？
A：　だから、野球選手。
C：　有名だったんですか？
A：　うん、たぶん。
C：　ああ。
A：　知らないよ、おれも、お父さんから聞いたんだもん。
C：　なんだ。

このシナリオでは、2ヵ所の「間」が表示されていて、「まあ、そういう話ですよ。」の前の「間」が話が受けなかったときの気まずい「間」、「ジョー・ディマジオって誰ですか？」の前の「間」がいなくなった人を意識する「間」である。実際クラスでやってみると、いずれのタイプの「間」も、「存在を意識する」のシナリオより「不在を意識する」のシナリオの方がイメージしやすいことがわかる。特に「まあ、そういう話ですよ。」の前の「間」は、面白い話のつもりが相手に受けなかった気まずさの「間」で、日常のおしゃべりでもテレビのバラエティ番組でもよく遭遇する瞬間なので、意識しやすい。平田のワークショップでは、『文法』のビデオを観る限り、また演劇学会やエクステンションカレッジでの参加体験からしても、「気まずい間」への注意の喚起は無かったように記憶しているが、それはあくまで「存在を意識する」・「不在を意識する」というテーマを伝えるためのアクティヴィティとして焦点を絞ったためであろう。ただ、筆者の場合、「存在」・「不在」も含めて、「間」の効果を伝えたかったので、小さな「気まずい間」にも注意を喚起しておいた。さて、「不在」のテキストで肝心の「ジョー・ディマジオって、誰ですか？」の前の「間」であるが、極端な言い方をすれば、ここは伸ばせば伸ばすほど面白くなる。ところが、クラスで実際にやってみると、あれほどリラクセーションを工夫した後でも、最低限の緊張が残っているらしく、皆の前でやるとなると、早く終わらせたい気持ちが働くようで、この「間」の効果を利用する余裕が無い。何も指示をしないと、「うん」と「ジョー・ディマジオ」の間がほとんど空かない。皮肉な言い方をすると、授業中あてられて答えられなくて黙っているせいで空いてしまう「間」には耐えられても、意識して積極的に何も言わずに空ける「間」には耐えられないのだ。「思いっきりあけてごらん。」という指示を何度も繰り返してやっと意味深長な「間」の効果がわかるパフォーマンスが得られた。生の時間の流れとして「間」を利用できるのは、演劇の特権である、と平田は言う。「間」を観客の想像力に委ねて、退屈の一歩手前でつなげるのが、最も面白い。同感である。『文法』のビデオにも、よく頑張ってここの「間」を引き伸ばしている例が収録されていて、楽しめる。1人が去った直後の「間」を空ければ空けるほど、観る人の想像力は刺激され、残った2人の関係がクローズアップされて、それが男女であれば色っぽい関係に見えてくる。

『文法』では、このあと「同時多発会話」の解説と練習が収録されている。「同時多発会話」とは、文字どおり1つの場で同時に複数の会話が進行することであり、誰かと話をしながら実は別の人たちの会話に注意を向けていることを演劇の台詞として成立させたものである。「同時多発会話」の最も顕著な作品は、研究所3部作の完結編『バルカン動物園』であるが、この作品を平田の作品として最初に観たら混乱するくらい「同時多発会話」が多く、テーマの面でもか

Hosei University Repository

なり欲張った盛り沢山な作品に仕上がっている。『平田オリザの文法』には、ユートピアを求めて旅する船上の人々を描いた『南へ』という戯曲の「同時多発会話」部分を練習するシーンも収録されているが、筆者のクラスは、平田の芝居の鑑賞法を学ぶクラスではないし、練習の難易度も上がるので、「同時多発会話」については、雑談として話題にするに留めた。

『文法』のビデオの最後の2章は、「創作」と「創作発表」で、グループに分かれて10分間の演劇をつくるアクティヴィティを紹介しているが、今回担当したクラスのレベルでは、これを英語で実践するには無理があったので、本稿では詳しい紹介を割愛させていただく。

6.『草原の輝き』を用いたドラマ・リーディング

(1) 『草原の輝き』

この映画を観ていなくても、タイトルだけは聞き覚えがあるという人が多いのではないだろうか。夢と希望に溢れた青春の日々を象徴するタイトルである。映画を観れば、このフレーズがワーズワースの詩の一節であることがわかる。

Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;
We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind.

テーマとしては、10代後半のセックス、自己実現をめぐる価値判断、親と子の葛藤などが盛り込まれ、相互に影響し合う要素として巧みに描かれている。細かい点では脚本と映画で食い違いがあるものの、物語の梗概は以下のとおりである。

BudとDeanieは、2人が通うカンザスのハイスクールでは公認の恋人同士である。交際が深くなるにつれてBudはDeanieの肉体を求めるようになるが、Deanieはこれに応えられない。Deanieの母親はセックスを罪悪視して娘の交際を抑圧する一方で、Budの父親Aceの経済的成功には関心を示し、玉の輿の娘の将来を期待してもいる。Budの父親は貧しい農場の出でありながら石油を掘り当てて金持ちになり、フットボールのスター選手である息子の将来に大きな夢をもっているので、美人ではあるが貧しい家庭の娘であるDeanieとの交際を快くは思っていない。息子にエール大学を卒業させ東部の一流企業に就職させようと考えているAceの思いとは裏腹に、Budはハイスクールを卒業したらDeanieと結婚して農業大学で学び、Aceの古い農場を引き継ぎたいと思っていたのだが、身を持ち崩した姉のGinnyに失望するAceに逆らいきれず、大学卒業後はDeanieと結婚することを条件にエール大学に進学することに同意する。しかし、Deanieとの関係は、セックスをめぐる行き違いから気まずくなり、Budは奔放な同級生Juanitaの誘惑に負けて関係をもってしまう。Budを失い、家庭にも安らぎを求められないDeanieは、精神のバランスを失い専門の施設で治療を受けることになる。一方、Budはエール大学に進学したものの学業に身が入らず、放蕩の日々を送るうちイタリアンレストランで働くAngelinaと知り合う。Aceはそんな息子を更生させエールでの学業を続けさせようとした矢先に株の大暴落で全財産を失い、自分が別れさせたDeanieと似た踊り子を償いとして息子の一夜の慰めに買い、自分はホテルから飛び降り自殺する。年月が経ち、Deanieは施設で徐々に回復し、施設で知り合ったJohnと親しくなり、先に退院した彼からプロポーズされているものの、Budのことを忘れられずにいる。退院の日に信頼するJudd医師から不安から逃げてはいけないと忠告され、DeanieはBudに会う決意をする。嘘をついてまで娘とBudを合わせまいとする横暴な母親と対照的に、父親のDelがBudはAceの古い農場を引きついで暮らしていることを告げる。かつての同級生達は、BudがすでにAngelinaと結婚して家庭をもっていることを言えないまま、DeanieをBudの農場へ送っていく。Deanieは、そこで初めてBudは結婚して子どももいることを知り、彼とやり直すことはできないと悟る。

作者のウィリアム・インジは、第二次世界大戦後のアメリカ劇壇において、アーサー・ミラーやテネシー・ウィリアムズに次ぐ劇作家として嘱望された人物であり、『いとしのシバよ帰れ』(*Come Back, Little Sheba*)、『ピクニック』

Hosei University Repository

(*Picnic*)、『バス・ストップ』(*Bus Stop*)、『階段の上の暗がり』(*The Dark at the Top of the Stairs*) などの作品は、いずれも映画化され日本でも公開されている。『草原の輝き』(*Splendor in the Grass*) は、インジがこうした4本の代表作の後、最初から映画のために書き下ろしたオリジナル・スクリーンプレイであり、1961年のアカデミー最優秀映画脚本賞を受賞した逸品である。この後のインジは、劇作家としては不振で、1973年に60才で自殺したが、この間もいくつかの戯曲を発表し、小説も手がけ、カリフォルニア州立大学の教授として劇作を教えてもいた。『草原の輝き』を監督したハリウッドの巨匠エリア・カザンの自伝 (*A Life*) に、インジとこの映画についての回想が綴られている。

> What I like about this ending is its bittersweet ambivalence, full of what Bill had learned from his own life: that you have to accept limited happiness, because all happiness is limited, and that to expect perfection is the most neurotic thing of all; you must live with the sadness as well as with the joy.

「限られた幸福」とともに生きる決意をしたヒロインとは対照的に、インジには劇作家としての自らの限界を認識しつつ、喜びや哀しみとともに生き続けることはできなかったということなのだろうか。

(2) シーンを選ぶ

1ペア5分程度でドラマリーディングを行なうためのシーン選択である。週末に各自どのあたりをやりたいか候補を考えてくる宿題を出しておいたのだが、ペアでやるので相手の好みもあり、またこの日に体験したワークショップの影響もあるかと思われたので、3日目の残り時間のほとんどをペア別の映画モニターと本読み・立稽古の時間に充て、最後に選択シーンとキャスティングを書いた紙を提出させた。

4日目の講義は、受講生が選んだシーンを中心に映画の該当シーンをモニターしながら、語学的・内容的解説を行なった。受講生が選んだシーンは次の部分である。ペアによって、長いシーンを1つだけ選んだところと、短いシーンを2つ選んだところがあったが、ここでは映画の流れに沿って順番に紹介する。尚、ページ数は金星堂のテキストによる。

(1) BudとAceの話し合いのシーン。息子をエール大学に入れ卒業後は東部の一流の石油会社に就職させたいと願うAceの希望を知りながらも、自分はDeanieと結婚して農業大学に進み、町外れにあるAceの古い農場を継ぎたいと切り出すBud。そんなBudにAceは、エール大を卒業した後でもまだDeanieと結婚したければ許すが、それまでは適当に遊べるタイプの女とつき合いながら辛抱するよう促す。素行の悪い姉のGinnyに失望しているAceの気持ちを知るBudは、とうとう説得されてしまう。(p. 29, l. 19–p. 31, l. 23)

(2) 肺炎で入院したBudの命が助かるように祈るDeanie。最善の祈りのことばを教えてほしいと言うDeanieに、自分の心のままに祈るのが一番良いのだと諭すWhiteman牧師。(p. 58, l. 23–p. 59, l. 11)

(3) 通院中のBudとSmiley医師の対話。軽い気持ちでDeanieとの交際のことを冷やかすSmileyにBudはセックスをめぐる行き違いがあることを相談しようとするが、助けは得られない。(p. 59, l. 12–p. 60, l. 29)

(4) ハイスクールの教室。Metcalf先生がこの映画のモチーフであるワーズワースの詩の一節を朗読している。JuanitaにBudを奪われたことを噂され追い詰められたDeanieは授業も上の空でいる。見咎めた先生に詩の意味を質問されるが、自身の喪失感に重なる内容を説明するうち、耐え切れなくなり激昂して教室を飛び出す。(p. 64, l. 1–p. 65, l. 24)

(5) Wichitaの精神科クリニックで、作業療法に取り組むDeanieとJohnny。Deanieは油彩画、Johnnyは彫金に取り組んでいる。自分を世界最高の外科医にしたがる父親との葛藤や執刀の恐怖を語るJohnnyをDeanie

Hosei University Repository

が励ましているところへ彼女の両親の来訪が告げられる。(p. 94, l. 19–p. 95, l. 23)

(6) Wichitaのクリニックの Judd医師のオフィス。数年の治療の後、Deanieは退院の日を迎える。Deanieは、信頼するJuddに先に退院したJohnnyからプロポーズされていることを打ち明けるが、Budに対する自分の気持ちを確かめる必要を諭され、勇気づけられる。(p. 112, l. 6–p. 113, l. 20)

(7) BudとDeanieの再会のラストシーン。かつての同級生達がDeanieをBudの農場へ案内するが、彼が結婚して子どももいることを告げることができずにいる。Deanieは、Budから家族を紹介され、彼との関係が完全に終わったことを知る。(p. 120, l. 23–p. 125, l. 24)

以上のうち、(6)のシーンは、短いが映画のクライマックスにつながる重要で印象深い部分なので、このシナリオの語学レベルを伝える意味でも引用しておく。

DEANIE. Well…I'm taking the noon train…. I'll be home in a few hours….

DR. JUDD. How do you feel about going home?

DEANIE. Going home…is like going to a foreign country.

DR. JUDD. How long will you stay?

DEANIE. Well… John has asked me to marry him, Dr. Judd.

DR. JUDD. (*A little amused*) And you waited until now to tell me!

DEANIE. Well…

DR. JUDD. Are you going to accept?

DEANIE. I don't know.

DR. JUDD. Do you love John?

DEANIE. I…think so. It's different from the way I felt about Bud, But I…love him.

DR. JUDD. I see no reason why both of you shouldn't have a happy future. John is back home now, practicing medicine, getting along very well.

DEANIE. (*With a little pride*) I know. I've heard from him every day since he's been gone.

DR. JUDD. (*Smiling*) Oh, of course. Uh…will you see Bud when you're home?

DEANIE *flinches a little at this question.*

DEANIE. I…don't know.

Sound of taxi outside. DEANIE *is glad to get out of answering this particular question. She gets up.* DR.JUDD *walks to where she is at the door….*

DEANIE. (*As she goes*) My taxi. I better be going.

DR.JUDD. Deanie… do you think you'll be very happy married to John if you still don't know how you feel about the other young man?

DEANIE *doesn't answer. She looks down. Trembles.*

DR.JUDD. When we face these fears, they sometimes turn into nothing.

DEANIE. All right, Doc. I'll see him.

She looks at him hopefully…turns and goes….

受講生が選んだシーンのうち映画とシナリオの相違点として目立つのは、Deanieの精神科クリニックでの入院期間とラストシーンでのDeanieの台詞であろう。映画ではDr. Juddの台詞からDeanieの入院期間は2年半だったことがわかるが、シナリオではラストシーンに登場するBudとAngelinaの息子が3歳で乳飲み子の娘もいることから少なくとも4年以上ではないかと想定される。映画のラストのBud Jr.はもっと幼く、歩くこともしゃべることもできないし、Angelinaは次の子どもを妊娠中である。完成作品としての映画がDeanieの入院期間を短縮して描いたのは、DeanieがBudとの再出発を期待するのに無理のない時間設定を求めたからではないかと想像する。だからこそ、映画では、親友Hazelの 'Deanie, honey, do you think you still love him?' に対し、心の中でBudの後姿を見送りながらワ

Hosei University Repository

ーズワースの詩を唱えるエンディングが相応しい。長い人生のうちのつかの間の煌きのような青春への訣別になっている。一方シナリオでは、次のようなやりとりになっている。

HAZEL. Deanie, honey, do you think you still love him?
DEANIE. (*Sense of wonder*) I don't know. He's a totally different person to me now.
JUNE. How do you mean?
DEANIE. I'd always worshiped Bud like he was a god. But all this time he's been a man, hasn't he? Like other men all over the world, trying to get along.

フットボールの主将でハイスクールのスターだったBudしか知らなかったDeanieが、汗と泥にまみれて農場で働き貧しくとも堅実な家庭を築いている彼を目の当りにして、時の流れと生活の重みを噛みしめる台詞である。

また、その場の登場人物の数が多かったため、ペアで行なうドラマリーディングの対象には選ばれなかったが、最終試験の「印象に残ったシーン」について述べる問題で何人かの人が指摘していたのは、退院したDeanieに対し母親が懲りもせず一方的にBudに会わせまいとするのに対し、父親が静かにBudの居場所を教えるシーンである。Deanieの父親は優しく穏やかな人柄ながら、AceやDeanieの母親の強烈な人物像に押されて影の薄い存在であったが、それだけにここでの娘の成長を信頼しての決断が印象的である。Deanieの期待は、「限られた幸福」に終わるものの、この父親と娘の1コマが大きな救いになっている。

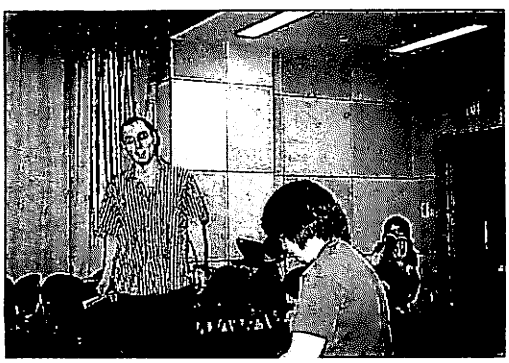
(3) ドラマリーディング発表

発表は、スタジオで行ないビデオ収録を行なった。発表の際の鉄則は、なるべく話しかける相手の顔を見る、無理に芝居しない、俯かない、である。

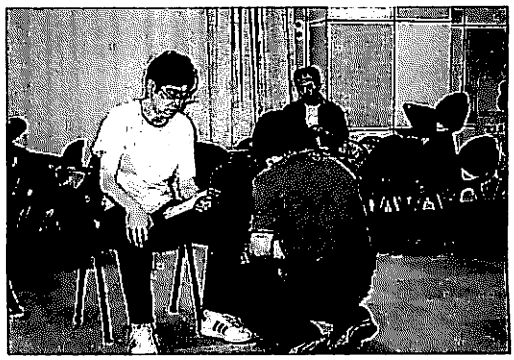
第1班は、若手の男性コンビで、BudとDeanieが再会するラストシーンを選んだ。この班は、終始リラックスした雰囲気でにこやかにやってくれた。細かい発音にとらわれず、自分の英語力の範囲で相手の顔を見ながらしっかりしゃべっているところが筆者は気に入った。発音を直されるのが恥ずかしくて英語を嫌いになる人は多い。アクセントがアイデンティティだと尊重される時代に、発音のあら捜しをするのは、現実的でない。また、ラストシーンは、「間」の生かし甲斐のあるところでもある。リラックスして堂々と話しているので、「間」が生きてくる。Budに家庭があることを知ったDeanieの「間」も良かった。この班のDeanie役の男性は坊主頭だったので、筆者が見るに見かねて女の子らしい帽子を貸し出したら、面白がってかぶっていて、そのせいかこの後の班は皆、外出するDeanieをやる人は帽子をかぶるようになった。この班は、空間の使い方も良かった。狭いところでちまちまとぎこちない芝居をされると、観る人はひどく退屈する。最初の班が教室を広く使ってくれたので、後の班もこれに習ってのびのびと発表してくれた。

Hosei University Repository

第２班は、男女のペア。女性はちょっと恥ずかしがり屋さんで、なかなかテキストから目が上げられなかったが、年長格の男性がそれにつられずに動作や表情をつけてゆっくり大きな声でしゃべり、大人しいパートナーをリードする感があった。日頃教える機会の多い若い学生だと大人しい方につられる傾向があるが、こちらから指示しなくても、アクティヴな方の学生が自然と相手をリードするあたりは、さすがに年長者の多い通教である。親であり社会人である通教生のこうした積極性には、毎回感心する。選んだシーンは、リスト(2)と(3)のシーン。牧師の 'I can't think of any that would be better than your own.' という決め台詞も説得力があり、Bud が Doc に心情を訴えるところも切実に聞こえた。

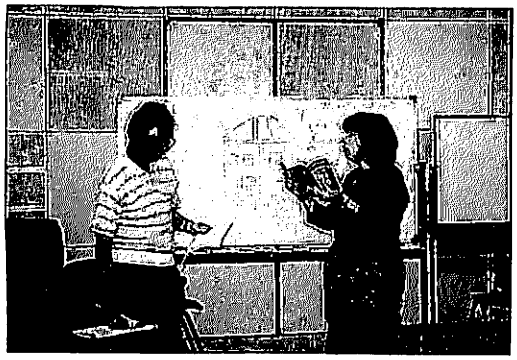


第３班も、若手男性コンビ。選んだのは、Bud と Ace の話し合いのシーン。リーダーシップをとっている学生が、強引な Ace を演じ、息子役の肩に腕を回すなど、威圧的なムードづくりを心がけている。Bud 役の男性も照れ屋だったが、このシーンでは、そこが父親に逆らえない Bud とつながってなじみが良かった。

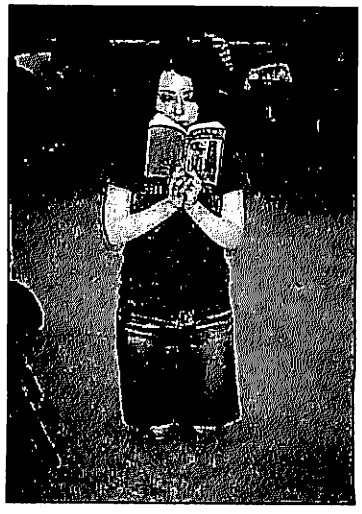


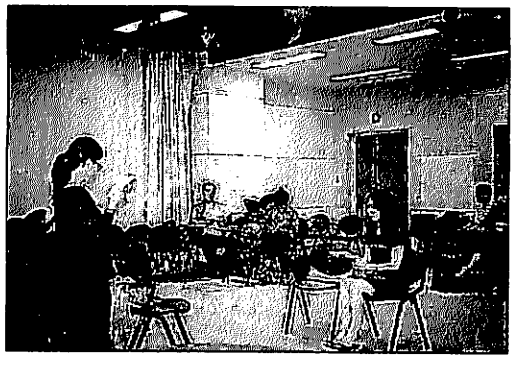
第４班は、ベテランの男女ペアで、作業療法中の Johnny と Deanie のやりとりと Deanie の退院シーンを発表した。この班の良さは、何よりも楽しんでいることである。女性は、若い娘の快活さを身体から表現していたし、男性が貫禄をつけて座ると、Dr Judd の台詞に重みが出た。小道具の使用にも積極的で、彫金中の Johnny は、持参した分銅を金槌で叩き、油絵を描く Deanie は、あらかじめホワイトボードにセザンヌ風の絵を描いて活用していた。このように身近な道具を劇中の何かに見立てるという工夫が嬉しい。さらに、Dr Judd のシーンで男性が普通の白シャツをその日着ていたポロシャツの上にはおって白衣に見立てていたが、白衣くらいは他のドラマでも結構活用できそうなので、理科系の同僚から古いのを譲ってもらっておくと便利かもしれない。

Hosei University Repository



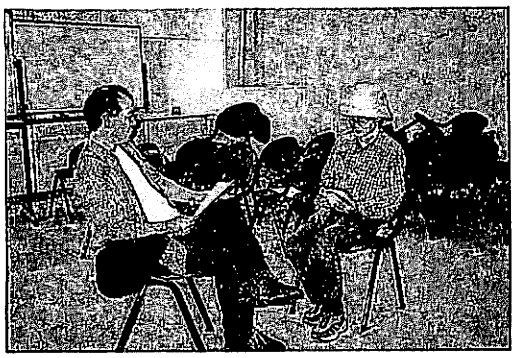
第５班は、若手の女性コンビ。このうち１人がとても気乗りうすに見えて心配だったが、あとから尋ねたら、写真・ビデオの類がとても嫌いなのだそうだ。シラバスにも教育・研究上の記録用の撮影を断っておいたのだが、気の毒なことをしたと思う。ドラマの授業を受けてみたいけどいきなり撮影されるのはちょっと、という気持ちは理解できる。クラスルームリサーチに録音・撮影はつきものだが、本来の主役である学生に余分なストレスをかけないよう可能な限り配慮したいと思う。写真は、相手方の女性がDeanieの役でBudの命が助かるようひざまづいて神様に祈るところ。年齢的にもDeanieに近い彼女は、自然体でいても役へのなじみが良いという特典があったせいか、無理がなく楽しそうだった。この班が選んだもう１つのシーンは、Budを失ったと思ったDeanieが教室で取り乱すまでのシーンである。映画全体のモチーフであるワーズワースの詩の朗読にこだわり、一生懸命練習していたのが印象的だった。このシーンだと、先生役もDeanie役も両方ともこの詩の一節を朗読することになる。最後にDeanieが泣きながら教室から飛び出すところも芝居する予定だったが、緊張がとけたせいかなぜか走りながら笑ってしまったのをしきりと反省していた。多分照れもあったのだろう。





第６班は、男性同士のペアだったが、親子に近い年齢差があり、年長の方の受講者が若者と遊ぶのがうまい感じで、いいムードで協力していたのが、微笑ましかった。これもまた通教クラスのおいしいところである。この班が選んだのは、Deanieの退院のシーンとラストの再会のシーンである。Deanieの役を交代で演じることになったが、前述の最初の班の学生が、帽子をかぶるとDeanieになれる、という約束事を確立してくれたので、衒いが軽減されたのではなかろうか。

Hosei University Repository



7．ワークショップの効果

発表全体の印象としてワークショップの効果を実感できたのは、しぐさや間の取り方に無理がないこと、空間負けしていないところ、日常的なモノを劇中の小道具に見立てて遊んでいるところなどである。

緊張して早口に朗読や暗唱をしたら、「5分間」といえどもあなどれない言語量になる。意味を考えずに発話したら、たとえ膨大な言語情報を暗記できたところで、何の定着も無い。発表が終わったら記憶から消滅してしまうだろう。緊張すると忘れがちなことだが、人間が発話しながら動作を行なったり考えたりするのはあたりまえのことなのだ。自然な「間」をとったり動作を行なったりすることで練習する英語の量も減るわけだから、学生には極めて現実的な戦略にもなり得る。言語の分量を加減しても、それを学んだコンテクストが印象的ならインプットが定着する可能性が高い。

空間については、我ながらスタジオの使い方が秀逸だったと思う。ワークショップもドラマリーディングも、主たる演技空間をスタジオの中央として、観る人はそれを半円形に取り囲む形に着座し、筆者とビデオがその反対側に入った。すべてのアングルから観られてしまうというのは緊張しそうに聞こえるが、逆にどこが正面かが曖昧なので開き直ってしまったようだ。観ている人もビデオに映るので、演技空間に参加するようなムードで反応が良く、クラス全体で学習を盛り上げることができたと自負している。かつて同僚のネイティヴスピーカーの教員が同じスタジオでドラマを使った授業をオブザーヴさせてくれたのだが、ステージをスタジオの一辺に固定し、テーブルなどの大きな道具を据え、照明まで使ってしまったため、学生の発表に完成品を求めたかたちになり、発表もまた学習のプロセスであるという筆者の方針とは大きく異なる印象を受けた。

素朴な日用品の「見立て」は、中途半端にリアルな道具を苦心して準備するより、本来の演技の精神に適うのではないだろうか。気軽に試すこと、想像すること、遊ぶこと、肩の力を抜いた自己表現を盛り上げてくれる。

平田オリザのワークショップが教育現場で実践しやすく効果を上げやすい理由の第一は、押しつけがましくない点であると筆者は実感する。それは、出発点として参加者のすべてを受け入れる姿勢に起因する。従来の演劇教室では即座に欠点とみなされる声が小さいことなども、その人がこれまで生きてきた中で形成されてきた個性として尊重する。また、世間一般では「コミュニケーション能力の向上」をスピーチやディベートの訓練と履き違え、相手を説得すること、悪く言えば言い負かすことが優れた表現力であるという誤解が横行する中、他人の言葉に耳を傾け、他人に何かを伝えようとする、というコミュニケーションの素朴な原点を体験させてくれる。記憶力がいいとか悪いとか、運動神経がいいとか悪いとか、内向的か外向的か、という優劣判断で勝ち負けを決めるあさましさが無い。価値観の異なる他者との交流・共存のためのコミュニケーションを目ざしているので、参加者の誰かを追い詰めることが無いのだ。

8．成績評価の方法

こうした演劇ワークショップは、協同学習と

Hosei University Repository

いう学習スタイルを体験する上で極めて有効な手段であると考えるが、学校授業に導入した場合にどのような評価を行なうべきかという問題が、しばしば物議をかもすところであろう。

筆者は、個人別に成績評価をする以上は、何らかのペーパーテストを行なう方が、評価の目処も立ちやすく、学習者にも説得力があると考えている。パフォーマンスは、そのときは楽しくて達成感があっても、評価の客観性という点で限界があるので、これだけで評価をつけると、ほんとうにそれが正当な評価なのか学生に疑問を残すことにもなりかねない。今回の最終試験では、たとえば本稿の末尾に附したような和訳や語句の知識問題などのオーソドックスな出題を心がけた。と同時に、とくに今回は少人数であったことが幸いして、協同学習のプロセスをじっくり観察することができたため、主に以下の3点に留意して各学生の最終評価に生かした。

1．ペアごとの協力態勢
2．個人別の積極性
3．発表内容

The Teacher's Sourcebook for Cooperative Learning (Jacobs et al., 2002) は、協同学習の理念と実践方法を現場の教員向けに平易に解説しているが、評価の方法についても便利で説得力のあるアイデアを提供している。その中から、筆者の授業設計にとって有効であった項目をいくつか紹介して本稿の結びとしたい。

＊協同学習のような新しい学習スタイルを導入する場合には、早い段階での評価は避け、学習者が新しい学習スタイルに馴染むのを待つ。
＊グループ発表に対しては、フィードバックを与えることに重点を置き、個人別の成績評価は、主として個人の学習達成度を土台に判断する。
＊困っている人を助けてあげるという協同学習の理念を尊重すると、相対評価よりも絶対評価が好ましい。
＊何をどのように評価するかが初めからわかっている方が、学生の動機は高まる。
＊最終評価に影響しないレベルでの評価（あくまで改善を目的としたフィードバック）もあるべきだ。
＊たとえば学生同士による評価を行なうと、教師よりも近い距離で観察することになるので、臨場感のある評価ができ、他の学生の良いところが刺激になる。
＊協同学習に必要なスキルが発揮できたかどうかを、たとえば「他の人の話をよく聞いたか」などの項目を立てて、個人別に評価・フィードバックする。

＊　＊　＊

現場での真剣勝負こそ最高のFD（ファカルティ・ディベロプメント）です。法政大学通信教育部で2003年度夏期スクーリングの筆者のクラスに参加された受講生全員に、深く感謝の気持ちを表します。

参考資料

芸団協・芸能文化情報センター編　2002「ワークショップ」になにができるか？—多様性と向き合うための知恵—　芸団協出版部
芸団協・芸能文化情報センター編　2001　表現教育を子どもたちに—実演家よ、学校へ行こう！—　芸団協出版部
平田オリザ　1995　平田オリザの仕事1—現代口語演劇のために—　晩声社
平田オリザ　1997　平田オリザの仕事2—都市に祝祭はいらない—　晩声社
平田オリザ　1998　演劇入門　講談社現代新書
平田オリザ　2001　芸術立国論　集英社新書
Inge, W. 1973 *Splendor in the Grass*　金星堂
Jacobs, G. M. et al. 2002 *The Teacher's Sourcebook for Cooperative Learning* Corwin Press
Kazan, E. 1988 *Elia Kazan: A Life* Doubleday
成井豊　2000　成井豊のワークショップ—感情解放のためのレッスン—　演劇ぶっく社
鈴木周二　1977　現代アメリカ演劇　評論社
Voss, R. F. 1989 *A Life of William Inge* University Press of Kansas
平田オリザ　1996（ビデオ）体感ワークショップ　平田オリザの文法　紀伊国屋書店
平田オリザ　1996（ビデオ）カガクするココロ　紀伊国屋書店
平田オリザ　1996（ビデオ）この生は受け入れがたし　紀伊国屋書店
Kazan, E.（監督）1961（ビデオ）草原の輝き　ワーナー・ホーム・ビデオ

Hosei University Repository

付　録

1．つぎの対話を読み、下の問いに答えなさい。

ACE：Son... this is pretty late hours for a boy keeping football training.
BUD：I know, Dad....
ACE：You're the Captain of the team... those other fellows ①look to you.
BUD：Yes, sir.
ACE：I wasn't much older than you, Bud, when I fell off that crown block and hit the rig floor. And ②my running days were long gone. So you're running for both of us now. Been out with the li'l Loomis girl?
The atmosphere is tense.
BUD *doesn't answer. He nods guiltily.*
ACE：You're watching yourself with her, aren't you?
BUD：Yes, Dad.
ACE：You're not goin' to do anything you'll be sorry for, are ya?
BUD（*Obediently*）：No, Dad.
There is a pause.
ACE：She's a nice kid.（And a looker!）I've known her ③folks ever since–well, ④Del Loomis and I were boys together. I mean, I got nothing against 'em 'cause they're poor. I'm no snob or anything. ⑤Only difference between him and me is I have ambition. But if anything happened, you'd *have to marry her!* You realize that, don't you?

(1) ①を別の英語２語で書き換えなさい。 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
(2) 下線部②には、２つの意味が込められている。それぞれ日本語で簡潔に説明しなさい。
1．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　2．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
(3) 下線部③を別の英語１語で書き換えなさい。 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
(4) 下線部④を日本語に訳しなさい。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
(5) 下線部⑤を日本語に訳しなさい。
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿